

ミツマタ

牧 幸 男

3月は日差しも強くなり、私達のみならず、動植物にとってもうれしい季節である。この時期に咲き始めるミツマタは、春を告げる花のひとつである。わが国では仲春（啓蟄〔3月6日頃〕から清明の前日〔4月4日頃〕まで）の春を表す俳句の季語とされている。

ミツマタの特徴は、葉が全く出ないうちに花芽がほころびだし、美しい花を楽しませてくれる。花の色は、始めは地味な灰黄色だが、暖くなるにつれて黄金色に変わる。良く観察すると小さな花が寄り添って咲いており、まるで薬玉のような印象を受ける。東京あたりでは1月にはこの花が咲き始めるが、長野県内では3月の声を聞いてからである。



撮影：国営アルプスあづみの公園

ミツマタは、ジンチョウゲ科の落葉低木で原産地は中国中南部からヒマラヤ付近と言われている。成長すると高さ1～2m位、幹は直立し、枝が三つに分かれる特徴がある。12月頃から蕾が生じ、小型の蜂の巣のような蕾のまま越冬し、気温が高くなるのを待って葉に先立って開化し始める。花は花弁のない萼片が筒状に発達した無弁花で、先端は3裂し外面は白毛が密生、内側は無毛で鮮やかな黄色、反り返るようにして咲く。果実は、あずき粒大の瘦果が夏に熟す。生育場所は日当たりの良いところよりも、少し日陰になるような木の下を好む。山野に一部野生化もあるが、多くは和紙原料として栽培しているが、花の少ない時期の植物だけに、庭木として楽しむ人も多い。種類は樹皮の色によって赤木種と青木種に分けることができる。花は黄色が主であるが、戦後改良された紅色もある。一般に赤木種のほうが花の数が多く、観賞用に適している。花としては地味であるが、伊豆に富んでいるので、茶花としても利用される。

わが国原産の植物でないが、渡来した時期がはっきりしていない。『万葉集』（629～759）にサキクサ（三枝）と呼んだ歌が収録されており、これがミツマタと同じとする説があるので、奈良時代以前に渡来したのかも知れない。栽培の記録は室町時代（1336～1603）以降といわれているが、はっきりした記録は『大和本草』（1708）や『和漢三才図絵』（1713）に和紙の原料や観賞用に栽培している記述が最初とされている。

日本産と中国産のミツマタの違いは、外観は日本ミツマタの葉は幹も細めであるが、中国ミツマタは葉が大きく幹も太い。元々ミツマタは中国からの渡来であるが、気候風土の違いにより長年かけて変化したようだ。

古代には「サキクサの」という言葉が「三（み）つ」という言端ことばに係る枕詞とされており（例：「三枝〔サキクサ〕の三つば四つばの中に殿づくりせりや」〔催馬楽・この殿は〕）、枝が三つに分かれるミツマタは昔「サキクサ」と呼ばれていたと考えられている。この名付けられた訳は、ミツマタはあたかも春を告げるかのごとく一足先に淡い黄色の花を一齐に開らくため、その故をもって「先草」と呼ばれたのだとの考えがある。但し、他にも、ミツマタが縁起の良い吉兆の草とされていたため「幸草」と呼ばれたのだとも言われる。最も古い用例では、万葉歌人・柿本人麻呂の和歌がある。

季節に先駆けて咲く花であり、人目に触れることが多いはずだが、辺りの気温が低く、生活リズムが活発化しないためか、歌題となるのは明治以降が多いようである。

春去れば 先ず三枝の 幸くあれば 後にも逢はむな 恋ひそ吾妹
みつまたや みな首垂れて 花盛り

柿本人麻呂
森登雄

ミツマタの名前の由来は、牧野富太郎博士は「三叉はその枝が三本ずつに分かれていることによる。漢名は黄瑞香である。」と述べている。別名には、三枝、三枝、三叉楮、三叉柳などの他、三楯、三叉、三股、結黄、数珠草、結香等の呼び方がある。それぞれの名前の由来は、黄瑞香は黄色い花が咲く沈丁花のこと、三枝は春になると先ず咲く意味、結黄は花が枝をたわめて咲くから、数珠草は蕾が数珠のようにぶら下がり咲くからである。その他は木植物や花の咲く姿から呼ばれるようになったものである。

学名は *Edgeworthia chrysantha* で、属名はイギリスの植物学者の名前、種小名は「黄色の花を付ける」意から植物の花の咲く姿を示している。英語名は Paper Bush で、紙の原料の木であることが分かる。

ミツマタは茎の靱皮繊維がよく発達しているので、和紙の原料としては最高の品と言われ、紙幣や鳥の子紙などに利用されている。しかし、わが国の和紙はコウゾの利用が一番早く、次が雁皮でいずれも奈良時代には利用されていた。ミツマタが利用されるのは、前述した江戸時代になってからで、原料の歴史は一番新しい。今日では雁皮の栽培が難しいため、和紙の原料はミツマタが一番多く使われている。

薬用は、中国では生薬名を花蕾乾燥させたものを「夢花」(新蒙花又蒙花株とも呼ぶ)は、根の部分を「夢花根」と呼んでいる。夢花は声枯れや失声、羞明、目やにと涙の分泌過多などに用いる。夢花根は夢精、早漏、勃起不全、かすみ目、風に当たると涙が出る症状に用いる。わが国では眼科一般、解熱、消炎に利用している。

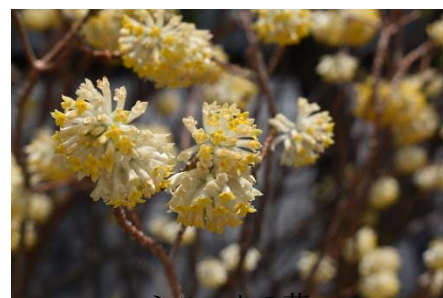
毒性は少ないが、樹液が皮膚に着くと皮膚炎を起こす事があるので承知してほしい。

この植物は和紙の原料として有名だが、和紙の原料には、他楮や雁皮が使われている。このうちミツマタとコウゾはジンチョウゲ科で、雁皮はクワ科である。ミツマタが和紙の原料として使われるようになるのは、16世紀頃と言われている。平安時代の貴族たちに詠草料紙として愛用された斐紙(雁皮紙、美紙ともいう)は雁皮が主とされている。記録上では、徳川家康が慶長3年(1598)にミツマタの使用を許可した黒印状が最初のような。しかし、『万葉集』にはミツマタの植物が時々登場しているので、和紙の原料として使われていたはずと言う説もある。

明治になり政府は雁皮を使い紙幣を作ることを試みた。ところが、雁皮は栽培が困難のため、栽培が容易なミツマタが紙幣の原料として明治12年(1879年)から、日本の紙幣に使用されるようになった。しかし、今日では生産地の過疎化や農家の高齢化により、2016年の以降使用量の約9割はネパールや中国から輸入されるようになっている。

ミツマタは花の少ない時期に美しくしい姿を見せてくれ、独特の雅味と俳味があるため、茶花や生け花の愛用されている。徳島県では、通常は廃棄されるミツマタの幹を使った木炭とそれを成分とした石鹼が製造されている。

花言葉は「肉親の絆」「永遠の愛」「絆切」「意外な思い」「壮健」等である。



ミツマタの花